

# 「善きもの」をめぐる一考察 —ショーペンハウアーとトルストイの『アンナ・カレニナ』<sup>1</sup>

鈴木 芳子

## 1. はじめに

本稿は、ドイツの哲学者ショーペンハウアー（1788-1860）の生の哲学と、ロシアの文豪レフ・トルストイ（1828-1910）の『アンナ・カレニナ』（1873-77）をつなぐ試みである。ロシアの評論家ボリス・エイヘンバウムは、『アンナ・カレニナ』の意味はショーペンハウアーを読んで初めて正しくわかると書いている。トルストイは『アンナ・カレニナ』をショーペンハウアーとの内面的対話を通して執筆したのではないか。本稿では藤沼貴の論文「トルストイとショーペンハウアー」<sup>2</sup>を先行研究として、ショーペンハウアー哲学の側から、この小説に光を当てたい。またショーペンハウアーの言う„das Gute“（善きもの）<sup>3</sup>が、トルストイの『アンナ・カレニナ』の中でどのように立体化されているかについて考察する。

## 2. ショーペンハウアーとトルストイ

トルストイがショーペンハウアーの著書に出会い感銘を受けたのは、1868年『戦争と平和』の締めくくりとして「必然と自由」論を執筆しているときである<sup>4</sup>。だが彼の若き日の「哲学は生の学である」<sup>5</sup>「われ欲す、故にわれあり」<sup>6</sup>や「善」をめぐる哲学的考察<sup>7</sup>には、早くもショーペンハウアーの思想に通じるものがある。

ショーペンハウアーの思想の出発点となっているのは、„Wille zum Leben“（生きんとする意志）である。彼によれば、理性ではなく、この意志こそが人間のうちにある本質的なものである<sup>8</sup>。この世界は万物の意志にあふれており、万物は各々の意志をまっとうしようとするため、利害が相反するとき、各々の生存本能、闘争本能のぶつかり合いにならざるを得ない<sup>9</sup>。だが他の動物とくらべたとき、人間は知性・理性において際立った特性を有し、私たち人間に求められているのは、理性

を思慮深く働かせて生を概観し<sup>10</sup>、荒ぶる意志をコントロールすることであるとも言えるだろう。

ショーペンハウアーの哲学におけるもうひとつの重要な概念として「善きもの」がある。彼によると、「善きもの」は相対的なもので、それを切望する意志との関わり合いにその本質をもつ（493）。魚は水中にいると具合がよく、モグラは土の中にいると具合がよいように、人間は誰しも、自分にふさわしい雰囲気の中にいるとき具合がよい（418）。彼は「善きもの」を、私たちに直接的に現在、満足させる„das Angenehme“（心地よいもの）と、間接的に将来に向かって満足させる„das Nützliche“（役に立つもの）の2種に大別した（491-492）。ここから私たちは、目の前にある明白で直接的なものの印象に圧倒されて、個体としての欲求を優先した場合、家族や社会の構成員として他者との共存共栄をめざした場合、あるいは人類全体を眺めやる場合など、各人のさまざまな視点における多様な「善きもの」を想定することができると言えるだろう。

さらにショーペンハウアーは、「人間の運命というのは欠乏であり、悲惨であり、不幸であり、苦患であり、そして死である」（481）と述べ、死と生をつなぐものとしてのエロスに着眼し、「性欲のうちに自然の内奥の本質、生きんとするあの意志がもつとも強力にあらわれている」「エロスこそは万物の基本であり、原理であり、創造者である」（452）と述べている。彼の哲学は、人間は常に何かを必要とし、欲望を本質とする存在であること、愛欲とエロスは私たちの脈々とつづく生命の源であると同時に苦しみのものであること、そしていかなる営みも、死という厳粛な事実の前ではまたたく間に消え失せる泡のようなものである、という死生観に貫かれているとみなすことができるかもしれない。

トルストイも実生活においてこうした諸問題を抱えていた。まずトルストイはソフィアとの結婚

後も愛人アクシーニア・バズイキナ (1836-1919) との絆を断ち切ることができなかった。また彼の妹 マリア (1830-1912) は、夫ワレリアン (1813-1865) がありながら、スウェーデンの子爵との間に婚外子をもうけていた。このときトルストイは妹かわいさから、スキャンダルを秘して義弟に離婚をすすめたが、義弟が急死 (自殺説が有力)、トルストイは自分の行為が義弟の死の引き金になったのではないかと苦悩する。いまやトルストイは現実の世界における情欲と情念、倫理とモラル、そして死の問題に直面せざるをえず<sup>11</sup>、これが彼の実体験をふまえた小説『アンナ・カレーニナ』を生み出す力となる。

### 3. 「愛と表象としての世界」

トルストイの『アンナ・カレーニナ』は、ショーペンハウアーの「意志と表象としての世界」を採用するならば、「愛と表象としての世界」を描いた作品だと言うことができるかもしれない。

教養ある上流階級の貴婦人アンナは、大物官僚である夫カレーニンと可愛い息子を捨てて、青年将校ヴロンスキーとの恋と情熱に生きようとし、悲劇への道をたどる。この小説のもうひとりの主人公は地主貴族レーヴィンである。全部で 239 章ある小説において、アンナの登場する章は 69 章であるのに対し、レーヴィンの登場する章は 102 章と多く、彼は一度しか会っていないアンナの魅力に強く惹かれている。彼はさまざまな哲学書を読むが、生活の中から眺めると、これらの哲学者たちの語る哲学は人為的な建造物であり、たちまちカルタで作った家のように崩れ落ちてしまうことに気づく。そんなレーヴィンが、ショーペンハウアーの「意志」という言葉を「愛」という言葉に置き換えてみると、この哲学に 2 日間だけ慰められる。レーヴィンが得た充足はかくも儂く束の間のものであり、アンナとヴロンスキーとの恋愛は 3 年 7 ヶ月しか続かなかった。ここから、人間の欲望は「愛」という名のもとに特定の対象に向かい、しばしば精神的価値と結びつくが、愛に永続性を付与するためには、生活の中で「善きもの」をどうとらえるか、またそれをどのように実践す

るかという問題と向き合うことが不可欠だと言える。

トルストイはこの観点において『意志と表象としての世界』を礎として、『アンナ・カレーニナ』で「愛と表象としての世界」を展開させたのではないだろうか。なぜならこの小説では、ショーペンハウアーの「世界は私の表象である」(31) と照応するように、多彩な登場人物がそれぞれの「愛と表象としての世界」で、それぞれの「善きもの」を手に入れようとするからである。例えば、アンナの夫カレーニンは「結婚は神の手によって結ばれたもの」と考えて、現状維持を欲する。いっぽう「愛の種類も心の数だけある」と言うアンナは、社会規範から逸脱した愛を選ぶ。しかし、この魅惑的なヒロインの荒ぶる意志は、破滅の因子をみずからの内に抱え込んでいる。恋は欲望を原動力にして前へ前へと突き進むので、恋が上昇気流にあるとき、アンナは罪の意識をもたないが、恋が下降線をたどると、罪の意識 (良心の呵責) がめばえ、彼女はその高い知性と冷徹な観察眼で、おのれのエゴイズムのみならず、生存競争と憎しみに満ちた現実の世界を見つめざるを得ない。

ショーペンハウアーは、„die Liebe“ (愛) を „die Selbstsucht“ (自己愛、我欲) と „das Mitleid“ (共苦) とに大別し、エロスは前者であり、真の純正な愛 (アガペー、カリタス) は後者であるとしている (511)。彼の言う共苦とは、他人の苦悩を自分の苦悩として受けとめることであり、この意味でアンナが愛と呼ぶものは、共苦なき自己愛であろう。アンナは自分の欲望に正直ではあるが、夫や息子セリョージャの苦悩には目をやろうとせず、ヴロンスキーとの間に生まれた女兒にも関心がなく、ただ自分が不幸になることだけを怖れている。彼女のヴロンスキーに対する愛は、ますます激しくエゴイスティックになっていくのに対し、ヴロンスキーのアンナに対する愛はどんどん消えてなくなっていく。

またショーペンハウアーによれば、人間は自分の特技や優れた特質を自由自在に発揮できるとき、幸福を感じる。いっぽう、優れた特性があっても、それを活かすことができないと、自尊心が傷つい

て不満が鬱積したり、自分と他者とを比べて他者に嫉妬したりする<sup>12</sup>。こうした負の感情は、人間に生まれながらそなわった自己保存の本能、意志と結びついていると言えるだろう。

アンナはヴロンスキーの愛情が薄れたことが不満で、具体的な嫉妬の対象なき嫉妬にかられるが、これも同様の理由であろう。アンナの絶え間なく見返りを求める愛は、いまや「相手に後悔させてやる」という報復感情となり、死だけが彼の愛情をよみがえらせる唯一の手段となる。それは彼を罰し、彼との精神的戦いに勝つための手段でもあった。かつて「愛と表象としての世界」で喜びと幸せに輝いていたアンナが、今では言わば「戦いと表象としての世界」の中で、ただ相手の心に深手を負わせることだけを欲している。アンナの死後、ヴロンスキーは生きる意味を失い、戦死をのぞんで義勇兵として戦場におもむいた。この結末は、報復行為は真正な理性の働きを欠いており、いかなる人間をもけっして幸せにしないことを示唆するものではないだろうか。

#### 4. より善き未来へ—結びにかえて

ここで「善きもの」と人間の生きる力との連動性に注目したい。

美貌の持ち主アンナは、それまで夫の社会的地位からくる恩恵に浴し、他者の賞賛を無自覚に享受してきたと思われる。だがいったん社交界から締め出されると、彼女にとって居心地のよい生活環境は失われ、もはや特技である社交術を行使することができない。ヴロンスキーが退役して田舎の領地で農場経営や病院建設にたずさわると、もともと読書家のアンナは彼の役に立つ存在、すなわち彼女にとって「善きもの」になろうと努める。アンナは次々と専門書を読破し、専門知識を身につけて彼にアドバイスをするが、ヴロンスキーのほうはアンナの愛に絡めとられていくようで息苦しく、また男性としての自主独立性を阻まれたような気がしてくる。こうしてアンナの「善き」目論みと努力は実を結ばないどころか、彼の心がさらに離れていく要因となる。またアンナは村の学

校の先生になるように勧められても、村の子供たちには興味を持たず、児童書を執筆して作家になるという試みも挫折してしまう。もはや彼女は自分の意にかなう「善きもの」で生活を満たすことができず、精神的に不安定になってモルヒネやアヘンを常用し、そのために理性と判断力が鈍り、自死という結果を招く。

いっぽうレーヴィンは父祖伝来の土地を守り、自分の子供たちにも父祖の世代と同じようによい教育を受けさせたいと切に願う。この大作のラストシーンでレーヴィンは「自分の生活に善の意味を付与する力が自分にはある」と確信し、未来に希望を託す。

このように『アンナ・カレーニナ』の主人公たちは、それぞれがそれぞれの「善きもの」を求めて人生を歩む。私たち人間の生きる力と「善きもの」を連動させて、より善き未来をひらくこと、ここに、トルストイがショーペンハウアー哲学を通して導き出した、人類のひとつの未来像を見出すことができるのではないだろうか。ショーペンハウアーとトルストイという知の巨星をめぐり、テーマをさらに掘り下げて考察することを今後の課題としたい。

## 【テキスト】

- ・ Arthur Schopenhauer : Die Welt als Wille und Vorstellung I . In : Sämtliche Werke, Band I , Cotta-Verlag/Insel-Verlag 1987. 以下 SW I と略記。  
本文において同書を引用ないし参照する際は、括弧付きでページ数のみを示す。
- ・ トルストイ『アンナ・カレーナ』については、木村彰一訳(筑摩世界文学大系 41、筑摩書房、1971 年)を底本に、望月哲男訳(光文社古典新訳文庫、2008 年)を参考にしている。

## 【注】

- 1 本稿は、ゲルマニスティネンの会 2019 年関東支部研究発表会での発表「ショーペンハウアーとトルストイの『アンナ・カレーナ』」を踏まえて執筆したものである。
- 2 藤沼貴『トルストイと生きる』春風社、2013 年、532 頁参照。この論文は、まずはエイヘンバウムの立場に立って作品を再検討することの必要性を明示して締めくくられている。
- 3 „das Gute“は通例「善」と訳されるが、「善」になると、社会規範やモラルのバイアスがかかる。そこで本稿ではショーペンハウアーの原文の文脈に照らし、各人の資質や環境、そのときの状況などによって多種多様な„das Gute“が存在することに鑑み、„das Gute“の相対性をより明確にするために「善きもの」と訳す。
- 4 同書 529 頁参照。トルストイは『戦争と平和』で人間の死と生、圧倒的な力をもつ必然と、かよわい人間の自由の問題を追求していたときに、自分の考えていたことをショーペンハウアーがそれよりもはるかに深く鋭く詳細に考えていたことを知り感激し、詩人で親友のフェート宛の手紙で「ショーペンハウアーは多くの人間たちの中でもっとも天才的な人物だと確信しています…。これは信じられないほどはっきりと、美しく照らし出された世界です」(1868 年 8 月 30 日付け)と記している。
- 5 同書 518 頁参照。トルストイが 18 歳のときに書いた哲学的エッセイ。
- 6 同書 518—520 頁参照。この頃トルストイが考えていたのは「私の意欲」という程度の意味で、ショーペンハウアーの意志とは少し異なるが、彼は学生時代にすでに、理性ではなく「欲する」ということに人間の魂の本質をみていた。
- 7 佐藤雄亮『前期レフ・トルストイの生活と創作—作家の「内なる女性像」から生じた問題とその解決を中心に』早稲田大学リポジトリ、博士学位論文、2016 年、144 頁参照。  
[http://wine.wul.waseda.ac.jp/search\\*jpn/a?SEARCH=%E4%BD%90%E8%97%A4%E3%80%80%E9%9B%84%E4%BA%AE](http://wine.wul.waseda.ac.jp/search*jpn/a?SEARCH=%E4%BD%90%E8%97%A4%E3%80%80%E9%9B%84%E4%BA%AE)  
トルストイは 1852 年 6 月 29 日付けの日記で「善」について考察し、留保つきながら「善」を、ショーペンハウアーの„das Gute“の分類とまったく同じ 2

種に大別している。

- 8 遠山義孝『ショーペンハウアー』清水書院、2001 年、135 頁。
- 9 Vgl.SW I ,S.455. 「[...] あらゆる個体は自分を世界の中心点となし、何にもまして自分自身の生存と幸福を顧慮する。それどころか本能にしたがった立場をとるなら、自分のために他のすべてを犠牲にすることを厭わない」。SW I ,S.456 「そのときには[...]『万人の万人に対する戦い』がただちに、このうえなくはっきりと姿をあらわすことになる」。伊藤貴雄はこれを「エゴイズム渦巻く世界」と呼んでいる。(伊藤貴雄『ショーペンハウアー 兵役拒否の哲学—戦争・法・国家』晃洋書房、2014 年、198 頁参照)。
- 10 Vgl.SW I ,S.380. 「[...] 理性のおかげで、人間は自意識をもって自分の諸々の行いを関連づけることができるようになる。理性は、人間につねに抽象的に全体を概観させてくれるものである」。
- 11 藤沼貴『トルストイの生涯』第三文明選書 16、第三文明社、2020 年、139—152 頁参照。トルストイはこの他にも、実兄セルゲイ(すでに内縁の妻がいた)とソフィア夫人の妹タチヤーナとの恋愛関係の解決に苦慮している。『戦争と平和』はスケールの大きい人間賛歌であり、そのなかで愛は生であり、生は神であった。これに対して『アンナ・カレーナ』では、人間関係や道徳をめぐる愛の問題が扱われている。
- 12 ショーペンハウアー『幸福について』拙訳、光文社古典新訳文庫、2018 年。自己の卓越性を発揮することについて 63—64 頁、自尊心が傷つくことについて 284—285 頁、嫉妬について 29 頁をそれぞれ参照。